慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十三年四月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第一〇九号）

目次

帰命の一念……近角常観…（1）
韋提希夫人……福島政雄…（8）
―仏教の女性観―
一枚起請文……花田正夫…（13）
正信偈私解……白井成允…（18）

第十卷　第四號

帰命の一念（一）

近角常観

今日の題は『帰命の一念』であります。御存じの方には申すまでも無いのでありますけれど、未だ他力信心の話をお聞きのない方のために申すならば、帰命とは南無の二字を翻訳したのが帰命である。南無の梵語を翻訳すれば、帰命となるのであります。

其の帰命の一念とは、即ち、無量寿如来の命に帰する、如来の命令に帰するといふ事で、言ひ換へれば、仏にすがる一念といふ事になるのであります。一念とは、仏のお慈悲を聞かせて貰つて、其の遣る瀬無き如来の大悲が、初めて心中に届いて下された、その一念である。

で、以下順次にお話するのではありますけれど、信心と申して外にあるのでは無い。この帰命の一念を発起した事が信心である。我々如来の遣る瀬なき御まことを承つて、あゝ有難いと心中に初めて帰命の一念を発得する、この如来のまことの初めて徹到して下された一念が信心であります。

其処で私は何時も際立てお話するのでありますが、此のお慈悲を聞かせて貰ふにも、弥々遣る瀬なき如来のお慈悲の聞こえて下さる処、初めてお慈悲に気のつく一念の処が肝腎である。

人生、生れて仏とも恵みとも知らざりし者が、初めて広大の悲願を承り、初めて如来のお慈悲を知らせて貰ひし処が信心の起り故、其処が一番肝腎である。故に今日はこの味ひをお話致さんと思ひこの題を出したのであります

さてこの帰命の一念が、此方より仏に向ひて、起こさんと思ひて起こるに非ず。自分の方より有り難くならうと思ひて自分の方より起こす如き一念では無いのであります。

今仏の方より私に向ひて、私を哀み遣る瀬なく思召し下されてある、その遣る瀬なき如来のお心を聞かせて頂き、

そのお心が初めて私の心に届いて下された処が、帰命の一念である。遣る瀬なき如来のおまことが、初めて私の心に届いて下された処で、発起するのであります。

されば帰命の一念を発起することは、仏の遣る瀬なきお心の程をば、聞かせて貰はぬ事には能はぬのである。故にこれより其の仏のお心の程をば共に喜ばせて貰ひ、この浅間しき人生の中に、帰命の一念を発起させて頂く有様を申し述べようと思ふのであります。

○

先づ第一に気をつけなくてはならぬ事は、我々の思ひと思ふ思ひには、一つとして真実と名づく可きものがないといふことである。

先日も或る方のお尋ねに、此事を申したのでありますが、人間が此世に日暮しする上に於て、誰しも自分を悪いと思つてる者は一人もない、皆自分は間違ひないと思うて居る。人間は誰でも生れ落ちるより、自然々々に我といふものが出来、自分の思ひに間違ひないときめこんで居るのである。なほも一つ申すならば、これが今生に始まりた事に非ず、無始曠劫以来、我々はこの根性のために迷うて居るのである。

さてかく我々は、自分は善い、といふ考をもつて人を眺める故、此の度は、人が悪しく思はれる。自分は間違ひないとの思ひをもつて人を見るもの故、人がゆがんで見えるやうになるのである。

さて一度この念か起きると、夫より人を憎み、悪しく思ひ、人に隔てる心を生じ、それからそれと悪念が伴ひて、迷ひの深みに落ちこんでゆくのが、我々日常生活の道行きである。

我々が、自分は正しい、間違ひが無いと思うて居るのが第一の誤りである。自分が既に正しいと思うてるもの故、人も亦自分を正しいと思ひ、かくして皆、五分々々の争ひをして居るのである。

しかして、この根本の、自分を正しいと思ふ根性がいつまでも抜けぬもの故、この世はいつまでもこの争ひを続けて行く外、なくなつて居るのであります。

○

猶進んで申しますに、我々かく人を憎み、隔てる時、その自分の隔て憎む心が善いかと、もう一歩押す時は、仮りに自分の考が真実正しいにせよ、自分の正しきを以て、正しからざる者を憎み、隔てるといふ事は実によろしくないのである。

自分が正しければ、正しからざる人を哀れみ、正しきに導くといふならば善けれども、自分が正しいと考へるために、人を憎み隔てるといふ事は、決してあるべき事ではないのである。

ここになると、我々の今日までの、正しい〳〵の考が甚だ怪しくなり、斯る心を持つて居る自分も実に悪いとなる。すると斯く人を疎んじ、隔てる自分も実に悪いとなり、世の中は、誰も彼もみな斯く五分々々で日暮しをして居る事に気がつくのである。ここになると世の中は何れが正しいやら、正しくないのやらわからぬ。

聖徳太子の十七憲法の中には

忿を絶ち、瞋を棄て、人の違へるを怒らざれ。人皆心有り、心おの〳〵執るところあり。彼是なるときは、我非なり。我是なるときは彼非なり。

我必ずしも聖に非ず、彼れ必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是非の理、誰か能く定む可けんや。相共に賢愚なること環の如くにして端無し。

是をもつて、彼の人は瞋ると雖も、還つて我が失を恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従うて同じく挙へ。

と。斯ういふ御言葉があります。ここになりますと、今まで自分の正しいのが何より確かな物差しと力んで居たのが、世の中は、何が正しいのやら、人が正しいのやら、自分が正しいのやら。まるで世の中は各自に、自分自分の物差しで計り合ひをして居るので、善悪といふ事が無くなつてしまふのである。而してこの十七憲法の御文が、不思議にも『歎異鈔』巻末の

聖人の仰せには、善悪のふたつ、総じてもて存知せざるなり。そのゆゑは、如来の御こころに、よしと思召すほどに知りとほしたらばこそ、よきを知りたるにてあらめ如来のあしと思召すほどに知りとほしたらばこそあしさを知りたるにてもあらめど、煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします、云云。

の御言葉と能く合ふのであります。

○

以上は初めに一応の事を申したのでありますが、近頃は大分新たなる御方がお出で下さる様子故、先づ第一に、我我が日常、自分は正しいの根性で日暮しをして居るのであるが、これが甚だ当てにならぬ事をお話申したのである。

さて斯く考へると、我々、人の正しいのは此方が悪いと考へ、自分の正しいのは人は悪いと考へ、互に五分々々で浅間しい日暮しをして居るので、人間の是非善悪なるものの当てにならぬ事は、これで一応はわかると思ひます。

さて一度ここに気がつくと、人生は唯煩悶あるのみで、今まで自分は正しいと思へばこそ、安んじてやつて来たのであるが、弥々自分が正しくないとなると、これからは唯

苦しみの来るばかりである。

さりながら、これだけでは未だ信仰になつたのでは無い。私自身の経験を申しますならば、私はこの点に至つて大に苦しんだ。といふものは、今まで自分を正しいと考へればこそ、安んじて自分の主張をも為し、人を悪しくも見て居たのである。自分は正しい道を歩んで居る。自分の信念は正しいと思へばこそ、今まで人にも先立つて、色々やつて来たのである。

処が、今まで自分の正しいと思うて居たことが、弥々正しくないとなると、今まで自分を正しいとして居たのは、人を欺き、偽つて居たのである。況んやその考より、人を悪しく不足に思つて居たなど、実に相済まぬ事である。結局、今まで間違ひないと思うて居た自分の信念までが、人を欺いて居た事になり、することなすこと、一つとして罪悪ならぬはなく、如何にも仕て見やうなき者なる事に気づいて来たのである。

これが多くの人の苦しむ状態である。原因は必ずしも一様ではない。或は今言ふ如く、自分は正しいことをして居る、間違ひないとの考より、ここに突き当る事もある。或は正しいとして居る自分が、思ひ懸けない間違ひを仕出かして、茲につき当る事もある。又極端な場合を言ふと、外界に一つも事柄はなけれども、自分の心の思ひなしより、人が悪しく思へ、隔て苦しむ事がある。

要するに、世間上の事、事の大小善悪、事実の有る無しに係はらず、何等かの動機により、一度ここに気がつくと如何にも人間の価値なき事が分かり来るのである。

近頃常に言ふ、親鸞聖人の『三信釈』のお示しに然に無始よりこのかた、一切の群生海、無明海に流転し、請有輪に沈迷し、衆苦輪に繋縛せられて、清浄の信楽なく、法爾として真実の信楽なし。

とあるのがこれであります。

○

処で、人間は妙なもので、斯くまで自分は悪い、当てにならぬと思ひつつも、真に心から自分は悪いと思うて居るかといふに、実はさうは思うて居ぬのである。

我々、自分は悪い、困る、と言つてゐる言葉の裏には、どうかして此の悪を止めたい、善くなりたいともがいて居るのである。如何にすればこの悪が止まるか、止めんとすれども止まず、まことに仕度いと思へども出来ぬと、善くなり度い〳〵の心も起れば、又一方には、悪いは悪いが、悪いのは自分ばかりでない、世間の者もみな悪いのである。世間の者もする事故、自分もこれで善いのぢやなどと、我と我から怒する考を起し、自分で自分を慰めるといふ風である。而してこれで安心出来るかといふに出来ぬの

である。人も悪い事をして居るといふ理由が、自分を許す理由にはならぬのである。

斯く一方からは「これでも善いのぢや」で安心することは出来ず、又一方からは「善くせんならぬ〳〵」で善くなることは出来ず、斯くして見やうなき状態に苦しんで居るのが我々人間の有様であります。

○

以上は人生問題の方よりお話したのでありますが、ここが実に肝腎の処で、皆様の苦しまるるも恐らくここの処だらうと思ふのであります。

すると、我々、悪い心を善くせんならぬと思うても善くならず、放つて置いても安心がならぬといふ事になる。

序に申しますが、今日世間一般の教は、大低この中のどちらかを教へて居るのである。今日の時代思想は、人間の悪い方面に対して、これは人の皆為る事である。人間として避くべからざる、やむを得ぬ処であるとの口実の下に、世の中のすべての事を許し、これが自然の有様である、人間の自然であると、言つて行かうとして居るのである。

又一方、厳格なる倫理道徳を主張する側に在りては、人間は悪い心があつてはならぬ。もつと正しくしなければならぬと、斯う云ふ風に律法的に説くのが世間道徳の教である。

我々はこの二者の中にはさまつて居るのである。為ねばならぬといふ事丈は、今日の者は皆知つて居るのである。百も知つて居るけれども、如何せん、その為ねばならぬ道が実際に行ひ得ないのである。それならば、行はないでも善い、人間はそんなこと出来るものでないと、安心して居られるかといふに居られぬのである。故に結局この世の中の教では、我々は安心は得られぬのである。またこの世の中の教に安心が見出せぬのみならず、動もすれば他力念仏の話でも、この二者の何れかに傾き易いのである。ここは大いに気をつけなくてはならぬのであります。

○

この他力の教を聞く上につき、従来説教を聞き慣れた人の陥り易き誤りは、如来は悪い者を助ける、浅間しい者を救ふと言つて下さるのである。故に我々は浅間しいけれども、この浅間しきままで助かるのである。この悪い心は人間は到底止むもので無いのである。夫れを今日止めようとするのが間違ひで、いよ〳〵止まぬものと、思ひ分つたのがお慈悲を喜ぶのであると、動ともすれば、斯ういふ頂き方になり易いのである。一寸考へると大層安心が出来たやうであるけれども、これでは真の安心は出来てゐない。

我々は、善い心の起らぬもの、悪い思ひの止まぬもの、故にお助け下さるのであると言つて居るものの、結局これ

では、浅間しき心は止まぬ、何時までもこの儘だといつた丈にて、真のお慈悲を頂くといふ所が無いから、これにては、何時まで経つても同じ事なのである。

何程人間は浅間しき者、悪い心のやまぬものと、心で思うて居りても、弥々其の悪のやまぬ胸の中を哀み下さる如来のお慈悲を突き止めずして言つて居るのでは安心は得られぬのである。ここは実に肝腎の処で非常に間違ひ易いのであります。

「私は長い間悪い心を止めよう〳〵と思うて居ましたが弥々止まらぬものと知らせて貰ひました」と云ふと、如何にも頂けたやうなれども、斯く言つて居る心持は、今日世間で人間は悪い心の止まぬ者、このまゝでよいのぢや、と言つて居るのと左程違はぬのである。

処が又一方には、きつとこの裏が出て来るのである。それは、如何にも仏のお慈悲には違はぬも、どうも自分の心は悪い、こんな浅間しい心では、と、自分の悪いことを気にする心である。

従来真宗では、一念の信を頂いた上からは、せめてはせめてはの思ひより、王法仁義の道を固く守るとある御教化を頂いて、どうも自分は、せめては〳〵の心より日常の日暮を善くすることが出来ぬ、どうかして善くならう〳〵と善くする方に力を入れるやうな事になるのである。動もすれば念仏を称へるにしても、自分の浅間しき心を取り去り、なだめる気持で念仏を称へるやうな事になるのである。斯くこの二者いづれかに傾き易くて、真に安心が得難いのであります。

○

処で、真実の他力本願の趣きは如何に、私が悪いから仏のお救ひがあるのぢやなどと、一口に言ひ得る如き軽きことではないのである。

私のこの頃ことに有難く頂いて居るのは、先にも申した親鸞聖人の『三心釈』のお示しであります。

一切の群生海、無始よりこのかた乃至、今日今時に至るまで、穢悪汗染にして清浄の心無く、虚仮諂偽にして、真実の心無し。

上来申す如くで、我々は穢れ。虚仮、偽りの塊りで、まことなど名く可き心は更に無いのである。而してその次に是を以て、如来一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、一念一刹那も清浄ならざることなく、真心ならざることなし。

此の「是を以て」が有難いのである。我々は今言ふ如くで、虚仮偽りの塊りで、まことなど言ふべきものは微塵もない。私共のすることなすことは、一点の光もなく、みな

闇である。その闇なる処、虚仮偽りなる処、隔て心の止まぬ処をば、仏は御覧下されて、その闇なるが故に、虚仮偽りなるが故に、其の者が可哀想ぢやとあるのである。故に「是を以て」である。

仏は我々のその隔て心のやまぬ処を哀みて、そのために一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に菩薩の行を行じ、飽くまで清浄真実になし下されたのである。

我々は五分五分の根性で、人が悪い、自分が善いと、人を隔て浅間しく思うて居り、することなすことに、一つもまことなど言はるべきものはない。

さりながら、まことが無いと知れたのが、仏の慈悲では無く、そのまことならざる者を見そなはし、その者が飽くまで可哀想であると、遣る瀬なく思召し下さる所が有難いのである。

言ひ換へれば、私のまことならざる所が、大悲の親の私を捨てきれぬところで、そのまことでないのが、実に哀れぢやと言うて下さるのである。

世間で言うても、こちらより隔て心で向へば向ふ程、向ふよりはいよ〳〵隔てず、汝は自分で隔てて居るが、汝の心は能く分りて居る。その隔てる心がいよ〳〵こちらは可哀想ぢや。汝は我を不足に思ふも、我は汝の心を能く知り抜き、一念も不足とは思はぬぞと、私の悪い所を御覧下されば、その悪い所が可哀想ぢやと云つて下さるのである。このところをよく知らせて貰はねばならぬのである。

処が、ここの所を、汝は我を悪しく思ふも、我は構はぬと言つて下さるのだとなると、はや頂き心がゆるんで来る。すると恰も自分が隔て、悪いことをするのを許された如き心地になつてしまふのである。

仏の大悲は、我々を不足に思召し下さらぬ段ではなく、我々のする事、なす事は実によろしくないのである。善くなけれども、その悪いことのやまぬ、隔て心の取れぬその心根が実に不憫である。その不実なる人間が、我は飽くまで見捨てられぬとある、ここが如来の御まことなのである。

こちらは不実、向ふはまこと、ここを横着に頂いて、不実とまことの取り替へこの如く頂くと、こちらの不実なる胸の中に、向ふの御まことが浸みこんで下さるところが頂けぬのである。

此方は何処まで行きても不実だらけの身、その不実なる者を、飽くまで見捨てず、飽くまで善くして下さる向ふ様の御まことを頂く一念に、あゝ長々申しわけがなかつた、不実でございました、この不実の浅間しき私を、能くも〳〵お見捨て下さらず、今日まで善くして下された親様の御まことと、初めて遣る瀬なき御心が解らせて貰へるのである。一念帰命といふはここであります。

未　完

韋提希夫人

――仏数の女性観――

福島政雄

今晩は韋提希夫人といふ題にいたしてあります。韋提希夫人と申せば皆さんはくり返しお聞きになつてゐることと思ひます。ただ今晩は結局、韋提希夫人のことを話して見たいと思ひますけれど、仏教で女性をどんなに見てあるかと、かういふ話から始めてみたいといふやうに考へて居ります。

仏教の女性観といふのでありますが、これはかね〳〵よく聞かれてゐることでもありますが、仏教では一面女を大変悪く云つてあるのであります。その悪く云つてあるのを四つ五つ御紹介申しますといふと……。

「女といふものは非常に悪いもので人を引張つて罪の門に入らせる」

さう云ふのがあるお経に出てをります。それから

「一度女人を見るともろ〳〵の功徳を失ふ。たとひ大蛇を見ても女人を見てはいけない。大蛇は怖いものだけれども、それよりももうすこし女の方が怖い」

と、これは『宝積経』と云ふお経に出てをるやうであります。それから

「三千世界の男子の煩悩が一人に集つて行く、それが女人の業障となる」

と。これは涅槃経に出てゐるのであります。それから同じ涅槃経でありますが

「女人といふものは大魔王である。一切の人間を食ふ、この世では足手まとひになるし、後の世では仇敵になる」

と、こういふひどいことを言つてあります。もつともこ

れについて一寸申上げたい、こんな話がありますが、お聞きになりましたでせうか。

『出曜経』といふお経があります。その中に面白い話がありますが、さあ女の方が聞かれますと、どうお感じになりますでせうか。かう云う話であります。

印度のことで、二三十人の青年男子が、一艘の船を艤装をしまして、遠洋航海に出かけるといふのであります。その目的は、海の向ふに宝の島があるといふことだ。その宝の島に行つて金銀・珊瑚などがあるであらうが、そんなものを沢山持つて帰らうと云ふので出掛けるのであります。

出掛けて数日間は無事にまゐりましたが、何日か経つたあと非常な暴風に出遭ひまして、船は帆柱は折れ、梶は砕けるといふやうなことになつて、もう沈まないばつかりとなり、暴風がやんだあとに、何処か分らない島らしいところに吹きよせられますのであります。皆が仕方がないから、兎に角上陸して見ようと云ふことになるのであります。ここはどんなところか分らないが、上陸して見ますと、それは一つの島でありまして、その島に非常に美しい可愛い女達ばかりが居るといふのであります。その女達が男子の青年を出迎へて非常に歓待する。さうすると青年達はその女達からさう云ふ待遇をうけていゝ気持になつてその島に住みつく様になつた。のちにはその男子たちがその女達を一人々々選んで夫婦になる、子供も出来るといふ風になりました。

ところがその女達がみんな口を揃へた様にして、この海岸から向ふの山の方に道が一つありますが忘れてもその道をたづねて行つてはなりません。それは大変危険な道だからと言ひます。そこで皆の男達は自分の女房の云ふことを守つて決してそちらに行かなかつたさうでありますけれども、一人の男だけが、どうもあやしい、何かこの島に秘密があるのぢやあるまいかと考へまして、夜中にすつと抜け出して、今その禁ぜられてゐる道を歩いて行きますと、段々その山の上に登つて、山の中程まで来ましたところが、そこに何か解らん、お城の様でもあり、牢獄の様にもある、そんなものがあるのであります。その囲りを廻つて見ても入口らしい所もない。そしてキット耳をすましてみますと云ふと、その中から非常に恨み叫ぶやうな声が聞えて来ます。そこで怪しいと思ひまして、そばの高い木に登つて上から中を見おろしますと云ふと、そこには一杯の男が打ちこまれてゐるといふのであります。

その一人の男に、今木に登りました男が声をかけまして「あんた方はそんな所へ入つてどうしてゐるんでありますか」と。中の男が答へて「あゝ、あんたもこの島へ来ましたか。可愛い女達がゐるでせう。実は自分も数年前に難船

してこの島に流れついて、あの女共から歓迎された。ところが、あの女といふのが、可愛い女の様に見えるんだけれども、本当は二目と見られないやうな悪鬼、羅刹のたぐひで、数年間一緒に居たけれども、そのうちに飽きがきて、飽きが来ると我々男をこの牢獄の中に打ち込んでおいて、毎晩鬼が二三匹あらはれてきて、その我々を生きながら食ふのです。」それから木に登つた男がびつくりしまして、これは大変だと大急ぎで木から辷りおりて帰りましたけれど、翌る朝を待ちかねて、朝になりますと、ソット他の男達を集めて、斯様々々の次第だと話をした。他の男達もびつくりいたしまして、「これは大変だ、この島を逃げ出さなければならぬが、さあ逃げ出す道がないが、どうしよう。御苦労だけれど今晩もう一度行つて、この島を逃げ出す方法があるか聞いて来て下さい」と、他の男達が頼むものでありますからして、次の晩に夜中に行つて、牢に居る人達に、「昨晩あんまりびつくりして、うろたへてつい聞くことを忘れましたが、この島を遁れ出る道はないものでせうか」とききますと、牢獄の中の男が答へて申しますのには「たつた一つ道があります。それは毎月十五夜の晩、明け方になりますと云ふと、この向ふの岡の上で大きな羽ばたきの音が聞えます。その時行つて御覧なさい。身体が金色、それから翼が銀色で、たくましい馬が、翼を持つた馬がゐます。その馬に頼んで乗せて貰ふと、それが空中を飛んで故郷へ連れて行つてくれます」。

それから木に登つた男が「有難う」と御礼を言つて、帰つて来て、そのことを翌る日皆の男の人に伝へますと、みんなで、十五夜の晩を待ちこがれてゐるのであります。いよ〳〵その晩になりますと云ふとみんな、もう眠らない様にして明け方を待つてゐる。さうすると明け方になつてはたして羽ばたきの音が聞えると、ソラツと言ふので、みんなで岡の上に登つて行つて見ますといふと、聞いた通りの馬がそこに居ります。二三十人の男がその馬の背にまたがり、首にすがりついて見たり、足にしがみついて見たり、尻尾にぶらさがつてみたりして、馬に鈴なりになつたといふのであります。その時にその馬が、おごそかな調子で申しますのには

「あんた方が、そんなにして自分にしがみついてゐることは差し支へはないが、一つ云つておくことがありますぞ。今にあの女達があとを追つかけて来ますぞ。種々なことを云つて、あんた方を引きとめようとしますぞ。その時に女に対する未練の情が微塵ほどでもあつたならば、たとへ私の背中にのつて首にしがみついて居つても、いよ〳〵飛び立つといふ時に振り落されてしまひますぞ。未練の情のすこしもない人であつたならば、尻尾の毛一本つまんで

ゐてもよろしい、必ず連れて行つてあげます」

さうすると云つた通りに女達がゾロ〳〵とあとを追つかけて来るといふのであります。そして種々なことを云つてしなをつくつて、その男を引きとめようとする。私はいやになつたでありませうけれども子供が可愛相ではありませんかといふやうなことまで言つて、頻りに引きとめようとする。するととう〳〵大低の男達の心が飴のやうになつていよ〳〵その馬が飛び立つといふ時には殆んど皆おちて、あの最初にこの島の秘密を発見した一人の男の外は皆振りおとされてしまつて、その一人の男だけがその馬に連れられて故郷に帰つて行つた。その一人の男とは外ではない、これがお釈迦様の前の生の事である」

と、こう云ふ風なお話であります。これは御承知の仏典の中の『前生物語』お釈迦様の前の生に托した物語が沢山あります、その一つであります。もつとも今お話しましたのはすこうし色艶をつけてありますけれど、兎に角さう云ふ話が『出曜経』に出てゐるのであります。

さあこのお話、仲々面白いお話でありますけれども、女の方がお聞きになると仏教といふものはひどいものだ。女は悪鬼羅刹の類か、そして男を生きながら食ふのか、そんなことを云つてある、ひどい、とかうお思ひになるに違ひありませんが、今の『涅槃経』に「女人は大魔王、よく一切人を食ふ」と、それがかう云ふお話になつてゐるわけであります。

それから、次には「一切の川には必ず曲りくねりがあるが、一切の女はみんな曲りくねつた心を持つてゐる」と、そんなのもあります。

それからよくお聞きになります「外面如菩薩、内心如夜叉」、外側を見ると菩薩様のやうであつて、心の中は夜叉の如し、これは矢張り『宝積経』ださうであります。

それから「一度女を見ると永く地獄・餓鬼・畜生の三途の業を結ぶやうになる」とも云つてあります。

それから「女に五種類ある。五つの悪いことがあるといふのであります。一つには女といふものはけがれてゐる。二つには女は二枚舌を使ふ。三つには女は嫉妬をする。四つには女は瞋恚の情、おこる。五つには女はあつちについたりこつちについたりして反復つねなし」と、さう云ふことをいつてあります。

もう一つ、今度は「女は五つの力で夫を軽んずる。一つには色の力、自分の容貌がよいといふので自分の夫を軽んずる。二つには親族の力で自分にはよい親族があるといふことで夫を軽んずる。三つには口業の力といつて、口が仲々達者で、夫をやりこめて夫を軽んずる。四つには子供の力、自分の子供といふものを自分の味方にし、力として、

そして夫を軽んずる。五つには自守の力としてありますから、自分の意見なり何なりを守つて神々夫の言ふことなんか聞かないで、夫を軽んずる」

斯う云うことをもうすこし並べてありますが、実際かう云ふことはひどいのであります。どうしてまあこんなに女人といふものをひどく言うてあるかといふことについては、三つの理由があるでありませう。

一つには釈尊が本当に女人をよくしようといふ御心持が先づ悪いところをちいと極端に言うて、それから女性の自覚をうながす、さう云ふ釈尊の御気持があるに違ひありません。その証拠には男性に向つては釈尊がまたひどいことを仰言つてゐる。それは前に申上げました様な、『大無量寿経』の五悪段といふやうなのは、あれには女に対してよりも、むしろ男に対してのお言葉でありまして、あれは男をひどく仰言つてゐるのであります。

それだから女に対しても、男に対してと同じやうに、一番急所の悪いところをえぐるやうに仰言つてゐる。然しながらそのお心持の底には何とかして女人をまことの人間になるやうにといふお心持があるやうであります。

それからもう一つは、釈尊のお弟子の中にも随分女に迷つたり、だまされたりした人がありますから、今度はお弟子の誡め、男の御弟子であります、そのお弟子を誡めのために、女と云ふものはかう云ふ怖ろしいものであると云ふことを仰言つた。

その両方が雑じつてゐると思ふのであります。さうでありますから、こんなに女人を悪しく言つてありますけれども、御承知の通りに、一方では仏典を見ますといふと、非常に立派な女性をうつし出してあります。聖徳太子が推古天皇の御前で御講釈になつたといふ、あの『勝鬘経』なんかがさうでありまして、この中心人物は勝鬘夫人と云ふ一国のお妃と云ふ地位にある女性でありまして、この勝鬘夫人は、お父さんお母さんに勧められて仏に帰依なさいまして、男も及ばぬところの十大受と云ひまして、十の大きな誓をされ、三大願と申しまして、三つの大きな願をなさり、その通りを実行していつて、そしてその国の七才以上の女の児は、皆このお妃であるところの勝鬘夫人が教育をなさる。かう云ふことを述べてありますところの『勝鬘経』では、確かに女性と云ふものを非常にこの男勝りの非常に立派な求道の人であると云ふことをあらはしてあるのであります。

未完

一枚起請文（2）

花田正夫

三

③、たゞし三心・四修と申すことの候ふは、みな決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ふうちにこもり候ふなり。

この段は「南無阿弥陀仏にて往生するぞと信心決定する、換言すれば、お慈悲の念仏ばかりでおたすけ下さるとそのまゝ信じる」これ一つがかなめで、三心・四修と申すことは、皆そのうちにこもるとの仰せであります。

三心については、上人の仰せに「詮ずるところ、弥陀をたのみて偽らず、真実なる心は至誠心なり。わが身のわろきに付ても、深く本願を信じて疑はざるは深心なり。念仏によつて極楽に生る事を得べしと思ひ定めたる心は廻向発願心なり」とあります。

四修とは、恭敬の心から念仏申す恭敬修、まじりのない、ただ念仏一つを申して余事をまじへない無余修。またとぎれ〳〵のない憶念相続する無間修。更に生涯を一貫して申す長時修の四つであります。

これらも皆、三千世界にたすかるよすがのたえて無い者をこそ、かねてしろしめしての弥陀仏の本願念仏と聞かされて見れば、自然にそなはつて来るのであります。

さてここに私は、随蓮房と光明房のことを憶ふのであります。

随蓮房は上人の御晩年にお仕へした素朴な念仏者で「南無阿弥陀仏にて往生するぞ」との仰せをそのまゝうけて、行住坐臥念仏申して居りましたが、上人の御滅後、三心具足の念仏こそ大切であると聞かされ、そのことが苦になつて遂に大煩悶におちました。或る夜の夢に、蓮華の美しい

池のある寺で上人が法話をせられてゐる、早速ありのまゝに上人に訴へると、蓮華を指された上人が「あれは桜か梅か」と尋ねられるので、「もとより蓮華で、桜や梅ではありませぬ」とお答へ申すと「念仏往生の義もまた〳〵斯くの如し。蓮華を蓮華と云ふが如し」と申されて夢がさめ、爾来「念仏は義なきを義とし、様なきを様とす」と心は定まり芽出度き念仏者として暮したのであります。これ、仰せをそのまゝ領解と頂かれ、そこに三心・四修は皆そなはることを身をもつて教へられる故事であります。

光明房のことは『秘伝抄』にあります。もと豊後の人で、在京の時に上人から御教化をうけ

「浄土の法門に別の義なし。弥陀の本願に、若し我成仏せんに十方の衆生、我名号を称せんこと下十声に至るまで、若し生れずば正覚をならじと誓ひ給ひ、今現に成仏し給へり。彼の誓願を頼んで一念の疑ひなく、常に称念せば決定往生すべし云々」

と承り、豊後に帰つてから昼夜おこたらず念仏して、彼が念仏の時は光明が室内を照しました。その瑞相を見て顕智房が弟子となり三年の間師事しました。然し「ただ念仏だに申せば必ず往生す」とばかり何時も繰り返して、珍らしい法門を何一つ教へられないので、顕智房は京都に上り上人の教をうけたいと思ひ立つて不審な箇所を手帖に誌し、上人の御前でそれをおたづね申さうとすると

「光明房は、何と勧めて居るか」

と先づ上人がお問ひになりましたので、

「たゞ念仏申せば決定往生するとばかり」

とお答へすると、上人は坐を改められて

「貴僧の師には魔王を選べ。魔王は、念仏して地獄におちると申すであろう。法然も念仏して仏に成る、と云ふ外には何も知らない。云々。

もし学問が志望なら、南都北嶺に学者が多く居られるからそちらで勉強せよ。又往生が望みなら、文字一字知らぬ者であつても心配はいらぬ。急いで下向して光明房と共に念仏して往生を遂げるがよからう。よく〳〵分別してきめなさい」

と誡められたとあります。

これは、すつかり歎異抄二章の親鸞聖人の仰せと一致するもので、私自身もびつくりして居る次第であります。

四

④、このほかに奥深きことを存ぜば、二尊のあはれみにはづれ、本願にもれ候べし。

この一句は、この御文を遺誓と申す根拠であります。即

ち、若し法然が、この他に奥深い法文を知つて居ながら、かくしだてをして、仮りに方便の教を真実だと偽つて説いてゐるのであれば、釈迦弥陀二尊の憐みにはづれ、本願にもれて、我身こそ地獄におちるとの御誓であります。

親鸞聖人も亦歎異抄二章で

念仏よりほかに往生の道をも存知し、法文等をも知りたるらんと心にくゝ思召しておはしましてはんべらんは大きなるあやまりなり」と関東の同行に告げられてゐます。

このことは、浄土宗を立教開宗せられずには居られなかつた両聖人の御心底にふれることであります。それまでの念仏の教は、智慧すぐれ徳高い人々にのみ真実の浄土は開かれ、凡愚底下の凡夫は、低く賤しい浄土への縁が僅かに結ばれる、と教へられ、極悪最下の凡夫が、極善最上の報土に生れる本願の真意が、見失はれてゐたのであります。そこに、十悪愚痴の法然、愚禿親鸞と名告り出られて、念仏往生の不思議を、御生命をかけてお勧め下さつたのであります。現在でも、兎角信仰とか宗教と云ふと何か高尚なこと窮屈な善人の道といふ様に思つて、俗人の世界では駄目だといふ風にとられ勝であります。ここに上人は御心の底を叩かれて、流罪死罪よりも、なほ重く大切な「本願にもれ候べし」といふ言葉で、愚痴無智の凡夫往生の道を証誡せられたのであります。

「たとひ法然上人にすかされまゐらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候」と親鸞上人が申されたのも、この御遺誓の確かさをそのまゝ仰信されて、浮ぶも沈むも仰せのまゝなりと信順されたお姿であります。

五

⑤、念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよく〳〵学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼人道の無智のともがらに同じて、智者の振舞をせずして唯一向に念仏すべし

この一段は結句であります。上人がぎり〳〵せんじつめられた一枚の御遺誓に、三度まで重語せられて、一文不知の愚鈍の身、尼入道の無智、智者の振舞をせずして、とありますところは、私共の落ちこみ易い点を何処までも御心配下さつての、切々たる悲心の流露であります。

「ただ一向に念仏すべし」の御目標は、無智、愚鈍の者であります。さうでありますから、真実の念仏者は、愚痴無智の身なりと、仏から知らされてゐる人であります。

法然上人の常の仰せには

「我は烏帽子もきぬ法然房なり。黒白をも知らぬ童子の如く、是非も知らぬ無智の者なり。只念仏往生を仰信す」

とあり、親鸞聖人は、八十八歳の自然法爾章に

「よしあしの文字をもしらぬ人はみな、まことのこころなりけるを、善悪の字しりがほは、おほそらごとのかたちなり。是非しらず邪正もわかぬこの身なり、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり」

と誌されて、最後の筆としてゐられ、聖徳太子は又

「我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず、共にこれ凡夫のみ、是非のことはり誰かよく定むべけんや」

と十七憲法に説かれてゐます。

仏智照耀するところ、前聖後賢の、割符を合すが如く一致するのであります。

同時に煩悩の酒に酔ひしれて無明の世界に彷徨する者の常として「われよし、われかしこし」の独善と独断にはまりこんで、そこから浮ばれないのであります。よき人に遍ひ、よき教を聞けば聞いたで、師や教を自己の飾りとし、念仏申せば申すで、慢心念仏、自力念仏、悪見念仏に墮して行きます。ここに「智者の振舞をすてゝ、只一向に念仏すべし」ときびしく、あたたかな慈誡があるのであります。只一向に！の一句に我等の沈みきつて浮ぶ瀬のないことを見抜かれた慈悲の至極が満ち、念仏すべし！の中に、おたすけ下さるは弥陀一仏ぞ、との悲心が切々とひびくのであります。

結岸の日稿了。

ゲエテの言葉

常に現在を離れてはいけない。各の瞬間は永久といふものゝ面影である。したがつて無限の価値がある。

○

一つの粗暴を斥けようとすれば、他に更に大なる粗暴を以てせねばならぬ。

○

同時代の人を学んだとて何にもならぬ、幾百年経つても少しも価値が落ちずにやはり尊敬されて居るやうな著作を残した昔の偉い人を学ぶがいい。

○

如何に細い毛も、その影を生じ得る。

○

天才の仕事に反対する者は、燃えて居る石炭をたゝくやうなものだ。消すどころか、火花が四方に散つて、飛んで

もないところからも燃え始める。

○

人は他人の口を止めることも防ぐことも出来ない。ただ他人が言ふまゝに云はして置いて、自分でやるだけのことをするより外はない。さうすれば遂には口の方が負けるものだ。

○

自分は長い間、多少とも有名な人の伝記を研究した結果かういふ考に達した。……世間を織物に譬へて見たら、その幅を唯だ広くする丈けの役に立つて居る経線になつてる人と、其をしつかり織上げるのに関つて力のある緯線になつてる人と、二通りの人がある。

○

自分と性質の似て居る者を愛して其を友達にするといふ風な人々と、自分と性質の反対してる者を愛してそれから学ばうといふ風な人々と二様ある。

○

誤謬は絶えず繰返して世に行はれて居る。其故に人は飽くことなく真理を繰返して述べねばならぬ。

○

他人からよい忠告を得てそれを用ゐる人は、自分で気が付いたのと同じである。

○

どんな人でも自分の気儘な境遇に達すると自分の欠点の曝露するものだ。

○

汝がどんな人と交はつて居るかを話すならば、私は汝がどんな人物だか当てゝ見る。

汝が今何をして居るか、それさえ知れば、私には汝が未来にどんな人物になるかが判る。

○

鐘の響は厳しいが、又人なつかしげに大気の中で振動するやうに、云ひ現はされた真理も、それに魂が添うて四方に伝波して何処かで共鳴を起すものだ。

正信偈私解（一）

白井成允

昭和三年三月

若かりし日、人生の意義に思ひ煩つた頃から、先師島地大等和上の御家庭に親しんで、毎夕、正信偈和讃を読誦する習慣をつけていただいた。思へばありがたい事である。その先師に別れまつつて既に久しく、再来年ははやくも三十三回忌を迎へまうすのだと思ふと、今更のように懈慢の罪がしみじみと感ぜられる。この懈慢の私をしかし先師は不断に護念してゐてくださる。その不可思議の御恩を憶ひつつ、私は今夜からあらためて此のなつかしい正信偈を読ませていただかうとおもひたつた。

幸にして先師の講讃したまひし記録が私の莫逆の友佐々木円梁兄の筆によつてまとめられて御遺著「真宗大綱」の中に収められたのがある。先師から汝この師を訪れて道を問へと勧められた多田鼎師の「正信偈本義」もある。その多田師から勧められて親しく法話を聴き、其の所説の全く先師の説かるる所と同じきに驚いた住田智見師の稿せられた「正信偈講義」もある。更に先師が親しく師とし父として仰ぎたまうた前田慧雲和上の「正信偈講義」もある。此等諸書を繙く時、私は曽て親しくみ教を受けたこれらたふとき法師たちの面影が浮んできて懐しさ限りを知らない。此等とともに桂利剣師の「正信偈講話」も亦私の机上にある。私は桂師には終に御教を蒙ることを得なかつたけれども、師の衣鉢を伝へて法幢を樹てゝをられる稲垣瑞剣師から此の書をいただいて其の遺教に浴するを得た。これら量り無き恵みをいただきながら私はこの貴き偈文を読ませていただかうと思ふ。

ただ宗教的文献は之を読む人各々の体験によりて種々様々に窺はれるようである。私にはただ私なりにしか窺はれない。是を以て限り無く深い此の偈文をただ皮相にしか味はひ得ないことを恐れるけれども、これら諸法師の御護念のもとに願はくは祖聖の御意を誤り解することだけは免れ

得しめられようと欲ひながら、此の私解を、畏敬する花田正夫師の厚意に甘へて、すこしづゝ慈光誌上に掲げさせていただかう。

島地大等	真宗大綱	明治書院	昭和五年
多田　鼎	正信偈本義	同朋舎	昭和十五年
住田智見	教行信証之研究	東海同朋大学	昭和卅年
前田慧雲	全集第三巻	春秋社	昭和六年
桂　利剣	正信偈講話	永田文昌堂	昭和卅年

猶古い講義の類は真宗全書・真宗大系に収められてゐるし、単行本も多数あるであらうが、特に調べてみたこともない。ただ私は仏教学といひ真宗学といふ学的研究については殆んど何も知らない者であるから、ひとりの素人にも一往はわかり易く説明してゐてくださる、そして今一般に入手し得る、上記の諸書に導かれながら、とぼとぼと歩いてゆかうとおもふばかりです。（十二月十六日夜

人は何のために生きるべきか、此の問ひが解かれない限り生きてゐる意義がわからない。無意義な日々を生きることは苦しい。或は人は如何に生きるべきか、此もまた恐ろしい問ひである。そしてその問ひに仮りに思想的に答へが与へられたにしても、その答へ通りに現実に生きられるであらうか。而もこの二つの問ひは表裏をなして離れ得ない。何のためにといふ目的が満たされ解かれる時は即ち如何にといふ道が満たされ解かされる時でなければならない。人生の目的或は理想と日々の生活とは相即して一つに融けあつてゐなければならないからである。

「人身受け難し、今已に受く。仏法聞き難し、今已に聞く。」　此の法句はいつも私の懈慢を叱つてくださる。まことに受け難き人身を已に受けながら、今已に受くといふしみじみとした自覚もなく、徒らに明かし暮らして生を送り去ること悲しむべきである。然るに此を悲しむべしと感ぜしめ、人身を我れ今已に受けてゐるのだと醒めしめられるのは、ひとへに是れ仏法を聞くことからくるのである。仏法聞き難しの歎きは今已に聞くと云ひ得る者にして始めてよく発するであらう。已に聞いて愈々聞き難きをおぼえて益々聞くことに励まざるを得ない。それは「此の身今生に向ひて度らしめずば、更に何れの生に向ひてか此の身を度らしめん」と省みしめられるからである。

然るに此の句は、今生といひ何れの生といふ語に於いて、既に吾等の常識的にいだいてゐる人生の限界を越えてゐる。常識のいだくところの人生はただ今生たるに過ぎない、此の人間界に生まれてやがて死んでしまふ、其の束の間の一生たるに過ぎない。然るに今此の句を通して響いてくる真理は、吾等の生命がただ単に此の一生のみに限られたるに非ずして、更に他の生々世々を含むものなることを

示してゐるようであるし、而して其処にはじめて此の身を度らしめるといふ表現が領解せられるようである。度らしめるとは、此の世に在る身を彼の世に度らしめるのである。此の世・此岸は其処に安らひ住むべき処に非ず、吾等は己が身を速に彼の世・彼岸に度らしめなければならない。此の念願が深く潜み強く動いてゐるのであることを肯ふのでなければ、此の句は読み得ないであらう。仏法は吾等の身を此岸から彼岸に度らしめる法である。而して此の法を聞くことこそ、真実に人生の意義を明かし理想を証することに他ならない。他の法に於いてはどうしても之を能くし得ないからである。

然るに此等の法句を告げたまうた覚者は之を結んで「大衆もろともに至心に三宝に帰依したてまつるべし」と宣べたまうた。是れ此の身を度らしめる究竟の道がただ至心に三宝に帰依するところに存するを以てであらう。

而して是れ日本仏教の始祖聖徳太子が憲法第二条に於いて篤く三宝を敬ふべきを教へたまうた所以であらう。而も三宝とは仏と法と僧とであり、三宝に帰依するの究竟態は唯だ是れ仏に帰依するに存すること、亦同じく太子の教へたまふところである。

実に聖徳太子、吾等日本民族のために、日本国の理想が君民一体なるところに大和を成すことに存し、其の理想を現成する道が南無仏の一仏大乗に存することを明かし教へて永く吾等に伝へたまうた。此の伝統を承け継ぎ聞信奉行するところに吾等が今生に於いて此の身を度らしめ得る唯一道が存する。而も此の道を更に親しく南無阿弥陀仏の誓願一仏乗として顕はし出だし伝へしめて吾等をして真に人身を受けたる所以の意義を全くせしめたまはるもの、是れ実に吾等の祖師親鸞聖人にましますのである。是を以て祖聖の教に価ひまつる、是れ実に人身を受け人間界に生まれたる至極の幸慶と云はねばならない。

※　※

法句経に言はく

「人もし百年の寿命を保つとも、無上の法を聞くことなくば、無上の法を聞く者の、一日生くるに如かず。人もし百年の寿命を保つとも、不死の処を見ることなくば、不死の処を見る者の、一日生くるに如かず。」

今。無上の法を聞き、不死の処を見る。是れ真に人生の究竟の理想を証する所以である。而も善く之を聞き之を見て人生の理想を証し意義を尽すを得るは、吾等にとりて、唯だ祖聖の教を承くるに由る。今此の如き意に於いて祖聖の正信念仏偈を私に解したてまつらうと欲ふのである。

昭和卅二年十二月十九日。

慈光　第十巻第三号昭和三十三年四月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

編集後記

仏陀降誕の聖月が参りました。本年も各地で盛大に花祭が行はれることでありませう。

天と地を指さゝれ、童顔微笑の誕生仏を中心に、花御堂が荘厳せられて

「み仏は、おれませり」

と老若男女に讃へられる風光は、冷たくきびしい人生にやはらぎとあたたかみを年々歳々に新しく招来することでありませう。「現行七歩」とは、六道の迷ひを一歩超え出た絶対界の尊さであり、そこに「無上尊」のひかりが放たれる。天と地にならぶなき光りが顕現するのであります。

○慈光誌も六頁を増し、これから新出発を致します。定価一部二十円（送料共）にさせて頂きます。但し前納されたお方にはそのまゝにいたします。半年分が百二十円、一年分は二百四十円になります。端数の金は十円切手又は四円切手を封入して下されば結構であります。御諒承願ひます

○△帰命の一念の近角先生の御原稿は、三回に分けて頂くことにいたしました。仏陀の遺る瀬なきおまことの、正しく徹到せよかしと念じ〳〵て下さる、慈悲のしたたりであります。御味読を願ひます。

△韋提希夫人の福島先生の御原稿は昨秋の御講話であります。今回は特に仏教の女性観を中心とした御話のところを載きました。仏陀が如何に我等の真相を徹見されて、そこに気付がしめて下さると共に、その故に無限の大悲を注いで下さる尊容を深く知らされます。東京都調布市仙川町七九四番地が御住居であります。

△正信偈私解は白井先生が月々御原稿を下さることになりました。真宗門徒の朝夕に誦しまつる正信偈の真意を開いて下さることは、誠に有難い限りであります。先生は京都市右京区山田葉室町にお住まひであります。

△一枚起請文は全く歎異抄の二章に通じるもので、法然上人の最後の御教化のぎり〳〵一杯を頂き胸ふるふ思ひがいたします。書き足らぬ、味ひ足らぬことばかりでありましたが、これを御縁に上人の玄意に触れて頂きたいと願つてやみません。

○ゲエテの語録から適当に至言、妙句をひろひ出してお目にかけました。如何にも世界の詩聖としての心境もうかがはれ、その中に、他山の石として教へられることの多いのに驚く次第であります。

○この語によりて私は念仏せしめられ、私の生死の根源を清められる。それは此の語が私をお救い下さる「南無阿弥陀仏」の根源の大御心を私に知らせて下さるからである。

今日私共の世界は、めざましい科学の進歩とともに、愈々深まりゆく無明の我執を根とする善悪正邪の分別抗争に忙がしく、日も夜も静かなり得ない。…殊に私共の祖国がこの氾濫の中に渦巻きこまれて、国をあげて二元対立抗争を事としつゝある現実は、身にしみて痛ましいことである。……この業苦から私共を解脱せしめ自在ならしめて下さる無碍の智慧を、私共は私共の祖先から伝えられ恵まれている。その智慧に連に醒めること、是れ今日の急務である。

「一子地」の語を味うことは私をしていくらかこの醒めに近づかしめて下さるようである、こんな思いで時々の縁に催されて書いたのが此に集めた諸文である。云々。

一子地　白井成允著、定価八十円、送料八円。

あそか書林。京都市中央区内七条通烏丸西一丁目。振替、京都一二三六七番。

「はしがき」より跋文

「一子地」とは不思議な語である。その語の示す境地は完くは誰人にも証し得ない崇い彼岸のものでありながら、その彼岸の消息をあまねく誰一人にも偲ばしめ得る微妙な作用を孕んでいるのが此の語である。

定価　一部　二十円（送共）
半年　百二十円（送共）
一年　二百四十円（送共）

編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ二八　花田正夫
印刷人　名古屋市千種区千種町馬走二八　本田政雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ二八　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番